

『木曾の最期』 英雄と生きた女性を読む

——遠隔授業システムを用いた言語活動による、読みの深め合い——

植村和美

一 はじめに 「物語を読み深める言語活動の充 実」カリキュラム研究

私たちはしばしば文学に吸い寄せられ、登場人物に心を寄せる。紀元前に記された史書から現代の電子書籍にいたるまで、文学は時代を経て心を育み、生き方を揺さぶる。その文学をともし語り合う仲間がいるならば、私たちは互いに他者や自分自身と会話し、文学を自分の実体験とし、より多様な価値観に基づいた確かな読みにたどり着くことができるのではないか。

大阪教育大学附属高等学校池田校舎はユネスコスクールとして、海外からの留学生も含めたワークショップが活発に行われており、生徒は、教科学習、学校行事、交流活動等を通じて問題提起、解決策の提案、実行といった問題探求活動を日常的に行っている。また、本校は附属小中高学校が隣接しているため、相互乗り入れ授業や連携授業、研究授業の機会が多く、意外な発見や思いがけない価値観

と遭遇し、良い刺激としている。今回の授業を行った五十七期生は、本校初めてのマレーシア海外修学旅行を実施し、ルック・イースト政策についてマラヤ大學生と半年に渡る意見交流会の機会を得た。生徒は、「違いをただ『違う』から正しくないと捕らえるのでなく、まず『違う』ということを知ることが大切。そして、知ったとき、どのような違いにも対応できる力が必要。」と述べている。

本校小中高附属学校園では、平成二十二年度から「自立し協同する力を育む教育」コミュニケーション力を基盤として「をテーマに、対話から会話へ、言語活動を念頭にした小中高連携カリキュラム研究を進めてきた。そんな中、平成二十四年度、教室内外との話し合い活動を通して物語読解を行った。高校一年生古文は、説話、随筆といった短文教材や、用言・助動詞・敬語の文法学習を終えたばかりで、語彙や歴史文化といった背景に関する知識は長文読解に足るものではない。しかし、生徒達は既習の知識により、問題点を見いだし答えを導き出そうと意欲に富む姿勢をみせてきた。

高校生は自己の将来を具体的に設定し始め、自分の知識が社会と

どのように関連し、自分の人生を社会でどのように位置づけるか模索の最中でもある。実経験に満ちるとき人生は豊かなものとなり、若者たちが積極的に自己を生きる行為となる。「読むこと」が彼らの実体験となり、確かな知識に支えられた豊かな心を育むため、仲間と共に問題を探求し、理解を深め、未来に対する責任を担う人間であってほしいと考え、古典における本単元を設定した。

二 単元教材の取り上げ方

平成二十三・二十四年度、高校一年生で『木曾の最期』ワークショップを行った。生徒達は班ごとに「武士道精神」「恥の文化」といった主題を掲げ、「正確な読解に基づく問題発見と提案のための図書館ワーク」を行い、次に「各班プレゼンテーションと質疑応答」、教師による補足説明を行った後、問題探求等のワークショップに取り組んだ。〔その1〕〔その2〕〔その3〕

その後、「最も共感する登場人物の生き方」について小論文を作成。一年生計164名(男子76名・女子88名)が選んだ登場人物は、「木曾義仲 59名(男子28名・女子31名)」、「今井四郎兼平 53名(男子24名・女子19名)」、「巴 31名(男子3名・女子28名)」等であった。最後の合戦を見せて東国へ去る「巴」の姿は、思いがけず多くの女生徒から「潔い」「かっこいい」と支持された。さらに『項王の最期』に登場し、恋人である項羽とともに漢詩を詠い、最後の合戦前に命を絶つた「虞」が、「巴」と比較し取り上げられたため、「巴」への共感を中心に、物語の人物像を教室内外で話し合った。

その際、平成二十四年度本校に導入されたばかりの情報機器・遠隔授業システムを用いて大学と連携し、「文学部大学院生・情報科留學生(中国)を交えて登場人物に関する意見交流」を行い、異なる意見を持つ三つのグループによる言語活動を物語読解に取り入れ、最後に、振り返りと評価を行った。〔その4〕〔その5〕

〔その1〕登場人物達それぞれの「規範となる『最後』」に対する不条理を読み取る

―登場人物の言語活動「断定の助動詞『なり』」で示される理想の人間像―

登場人物が「主語」なり(断定の助動詞)。「の」形で語っている箇所に着目し、「おのれ(女)」「我(男)」「弓矢取り」にとつて目指すべき「最期」があること、すなわち自己の存在を一般化する「断定の助動詞」によつて死に様が規範化され、「断定の美学」・「断定による運命選択」が決定付けられることを読みとる。

さらに、己の生き方を断定的に語りつつも義仲、兼平、巴それぞれ当時の規範からはずれる生き方を抜き出し、三者三様の生き方について意見交換をおこなう。

〔本文例〕

○義仲 「おのれは、疾う疾う、女なればいづちへも行け。我は討ち死にせんと思ふなり。」

○兼平 「弓矢取りは年ごろ日ごろいかなる高名候へども、最後の時不覚しつれば長き傷にて候ふなり。」

(資料①)

【その2】登場人物達それぞれの「最後」に対する覚悟」を読み取る

—登場人物の言語活動「意識的推移の助動詞『てけり』・自然的推移の助動詞『にけり』の使い分け—

幼い頃木曾の山中でともに育った「巴」「木曾義仲」「今井四郎兼平」の三人がともに粟津で「最後(のいくさ)」を口にする時、自害に対しては自然的推移を表す助動詞の組み合わせ「ぬ」+「けり」+「にけり」が、討死に対しては、意識的推移を表す助動詞の組み合わせ「つ」+「けり」+「てんげり(てけり)」が用いられていることに着目する。死に様は生き様とも言う。三者三様の考えや行動、合戦の時代の死生観を読み取り、話し合い活動によってより詳しい登場人物への理解を得たい。

また、古文教材『木曾の最期』と漢文教材『項王の最期』を読み比べ、「項王の最期」の「項羽」・「虞」の関係と『木曾の最期』の「義仲」・「巴」の関係を比較する。さらに「巴」・「虞」、「義仲」・「巴」、「兼平」・「巴」の「最期」に対する行動や心情の違いを読みとる。

(資料①)

【その3】グループ内ワークショップから、三つのグループによる協

同「読み」へ

—コミュニケーション型鼎談による読みの深め合い—

授業では、双方向型言語活動から鼎談へと、左記①から④の言語活動を進めた。

① 五人一班の八班それぞれが、指示した場面についての読解

ワークシートに取り組む。「重要単語→文法→現代語解釈→問題の発見→問題解決」とし、図書館ワークとして解釈と探求活動を行う。

② 教室で各班プレゼン発表を行い、質疑応答を行う。講義・寸劇・紙芝居等、方法は各班で考案する。

(資料②)

③ 班別プレゼンテーションを受け、教師による補足授業の後、作品中の登場人物を取り上げ、「最も共感する生き方について」各自で千二百字の論文を作成する。また、論文内容について振り返りを行う。

(資料①)

④ 教材の主要な登場人物三人(木曾義仲・今井四郎兼平・巴)を取り上げ、それぞれについて考察する。とりわけ左記の「義仲」と「巴」の会話に焦点化し、教室外から遠隔授業システムで大学院生、大学留学生を加え、三者で意見を交換し、互いの意見を考察する。

(資料③・資料④)

○義仲 「おのれは、疾う疾う、女なれば、いづちへも行け。我は討死せんと思ふなり。もし人手にかければ自害をせんずれば、木曾殿の最後のいくさに、女を具せられたりけりなど言はれんことも、しかるべからず。」

○巴 なほ落ちも行かざりけるが、あまりに言はれ奉つて、「あつばれ、よからう敵がな。最後のいくさして見せ奉らん。」とて、控へたるところに、武蔵の国に聞こえたる大

力、御田八郎師重、三十騎ばかりで出で来たり。巴その中へ駆け入り、御田八郎に押し並べて、むずと取つて引き落とし、我が乗つたる鞍の前輪に押しつけて、ちつとも働かさず首ねち切つて捨ててんげり。その後、物具脱ぎ捨て、東国の方へ落ちぞ行く。

右の互いの言葉は、実は会話として成立していない。「義仲」の命令と最期の迎え方への考えを聞き、「巴」は肯定・否定、共感・反感といった一切の返答をしていない。ただ互いに「最期のいくさ」への覚悟を口にし、「巴」は「最後のいくさ」をして見せ、「名乗り」も「分捕り」もせず、剛力を示した後「物具」を脱ぎ捨てて無言で去っていく。「義仲」と「巴」は、最後の会話で何を伝え合ったのか？『木曾の最期』全体の文脈、登場人物たちの細部を拾い上げ、言葉の裏に隠された真意について本文中に根拠を求めつつ解釈を深める。

言語活動を用いてより読みを深める場合、対話であれば、生徒達は自分の意見を相手に述べて満足し、正確な伝達や相手の意見に留意しないことがある、また誤解や反論に対し、分かりやすい説明や根拠・論拠なく自分の考えを反復しがちである。ところが、第三者が加わると、正確さ、丁寧さ、公平性を意識し無意識に言葉を調整する。また、異なる意見が出たとき、三者であれば、残る一者がどちらの意見に同意するかで「多数意見」が決定するため、個々が自分の意見の重みを感じ、安易に他者の意見に同調することなく慎重に会話を重ねることになる。

昨今ビブリオバトル等で作品について語る機会は増えているが、正確な読みや、さらなる読み深めを指導し、年齢や国籍を超えたコミュニケーションによって自分を他者に示し他者を自分に受け入れる協同作業を行い、新たな視点を取り入れつつ古典文学作品を読み味わいたい。

【その4】情報機器を用いた遠隔地とのコミュニケーションによって、「異なる読み」と出会う

平成二十四年度、大阪教育大学および附属学校に遠隔授業システムが導入され、教室を多方向から映し出し、随所で手元の資料をクルーズアップし、直接PC内のデータを送受信できる質の高いリアルタイムの相互通信が可能となった。

本授業では、大阪教育大学柏原キャンパス教員養成課程国語科院生および情報科に在籍する中国からの留学生と登場人物の話し合い活動を行い、大学院生の専門知識、中国からの留学生の異なる母国文化や価値観にほぼ生の形で触れ、「読み」のための話し合い活動の幅を広げた。

(資料③・資料④・資料⑤)

【その5】「読み」に関わるワークシoppに対する評価の観点

次表に基づき(1)から(4)を評価材料とすることで、生徒の力を客観的に把握し、指導に活かすよう心がけている。

(1) 次表の各項目を(5. 秀逸↑↑ 4. よくやった↑ 3. ますます 2. そこをなんとかもう少し↓ 1. どうにかならぬ

知識・理解	歴史的背景や史実、文法や構文に関する知識を身につけ、読解に役立てる。
技能	文法や語句に基づき、文学作品を読解する。
思考・判断・表現	意見を的確にまとめ、他者と交流しつつ価値観を広げる。
関心・意欲・態度	自分の意見を発表しつつ他者と意見を共有することで、考えを深める。

いか↓)の五段階で評価する。評価項目を決め、細分化して点数化することで、印象点や態度重視に片寄らない安定した評価になると考える。

- (2) 本校「夏期英国語学・他文化理解研修」引率として昨年度と今年度の二週間、Oxford 大学に滞在し、現地学生とともにアクティビティ、プレゼンテーション等に参加した。Oxford 大学生は、プレゼンテーションで必要なものは説明責任を果たすことであり、①文法や発音といった明確な言語表現 ②正確な根拠の明示 ③質問に的確に答えられる説得力 だと言う。私自身、授業で生徒が発言する際その三点を心がけている。方法を理解した上で言語活動、正確な文法解釈や的確な本文からの根拠抜粋があつて初めて、ワークシヨップによる読みが有効となることを強調する。

- (3) ワークシヨップで重視するのは、グループ内でのポジシヨニングである。生徒は小学校時代からワークシヨップに慣れており、

課題が出た途端その分野に詳しい仲間を支持し、簡単に正論にたどり着こうとする傾向があり、個々の思考が全体のものになり、全体の力が高まる作業は難しい。①グループの構成員に自分の考えを分かりやすく伝達したか ②積極的に他者の考えに質問や補足説明を加えたか ③予想される反論や意外性に言及したか ④意見を集約するためにメモを取ったりボードにまとめたりといった行動をとったか ⑤発表時に発表者以外がサポート体制をとっていたか など、グループ内で各自が協力し合えることを見つけあいながら、集団として力を高めていくことが重要である。

- (4) 昨今の生徒を見ていると、「自己評価」を何度か試みさせても、個々人であり異なる結果を示さない。いわゆる「俺流」を貫き常に満点の自己評価をする生徒群と、常に不十分と考え平均値以下の自己評価をする生徒群のどちらかが現れる。私は、自己評価よりむしろ「自分の所属する集団への肯定感」が、「自分自身に対する肯定感」につながるといふ観点から、個人による自班評価を行っている。ワークシヨップを通した自班への肯定感、自己評価結果に近いと考ええる。

(資料⑥・資料⑦)

三 「遠隔授業システムを用いた、言語活動による読みの深め合い」提案授業

科目 国語総合(古文)
 主題 多様な価値観による読みの深め合い—大学との遠隔授業システムを用いた言語活動によって—

単元の目標

○助動詞や敬語、語句の意味に注意し、「木曾義仲」「今井四郎兼平」「巴」三者三様の発言や行動を認識して読み分ける。

○「木曾義仲」「今井四郎兼平」「巴」のうち一人に対する自分の意見を他者に分かりやすく説明し、互いの意見を確認する。

○「巴」と「義仲」の別れを、「項羽」と「虞」の別れと比較し考察する。

○さまざまな意見を伝え合うことで、登場人物の行動や心理を詳しく読みとる。

指導計画(全十一時間)

第一次 『木曾の最期』 軍記物語に登場する人々の考え方や行動を知る。(7時間)

・各班で担当箇所ごとに「問いの設定」から班別図書館調べ学習へ(3時間)

・班別発表、質疑応答(2時間)

(資料①・資料②)

・基礎知識の補足授業(2時間)

(資料①・資料②)

第二次 『項王の最期』 最期を覚悟した「項王」とともに嘆く

「虞」の姿を読み取り、『木曾の最期』の「木曾義仲」「巴」と比較して登場人物への賛美や哀悼を確認する。(2時間)

・講義形式『項王の最期』(1時間)

・「最も共感する生き方について」論文作成(1時間)
 (資料③・資料④)

第三次 自己と他者の意見を相互に確認しつつ共有し、登場人物の心理や行動への理解を深める。(2時間)

(資料⑤・資料⑥・資料⑦)

・遠隔授業(1時間)
 ・振り返り(1時間)

大学との遠隔授業システムを用いた授業の展開(10/11時間)

対象 第一学年一組 41名(男子19名女子22名)

大阪教育大学柏原キャンパス

教養課程国語科4名(女子4名)

情報科修士課程留学生3名(男子2名女子1名)

授業日 2012年11月17日(土) 10時15分～11時05分
 目標 ○登場人物に対する思いを、根拠を入れて他者に分かりやすく説明する。

○『木曾の最期』『項王の最期』の二つの作品を読み

比べ、また複数の登場人物を比較することで、「木曾義仲」と「巴」の違った行動をさまざまな角度から把握する。

○教室内および教室外の第三者を加えて意見を確らし合いながら、新しい見方、自分の意見の変化を確認しつつ作品に対する考えを共有し読みを深める。

(資料⑤・資料⑥・資料⑦)

準備物

遠隔授業システム（視聴覚教室）、全紙サイズホワイトボード8枚（各班1枚）、キョード用フリップボード41枚（各人1枚）、付箋セット（班内で、誰の意見か分かるよう各自の付箋の色を変える。一班五人で五色とする）

四 高校生による「遠隔システムを用いた、言語活動による読みの深め合い」授業の振り返り

『木曾義仲』『今井四郎兼平』『巴』の人物像は、事前に論文を作成していたこともあり早く意見が出た。ワークシヨップ（一）では、『木曾の最期』と『項王の最期』の比較は、留学生から「中国では、英雄が殺されると妻や娘といった女性達もまず復讐を考える。覇権を握るか討たれるか将来への不安を残さないために、女性も生かしておいてはいけない。」との意見が出され、明確な歴史観に思わずみな納得したようだ。

ワークシヨップ（二）では、義仲の「おのれは、疾う疾う、女なればいづちへも行け。」の言葉の真意は「巴を生き延びさせるための義仲からの愛情の表れ」でほぼ一致した。ところが「巴がなぜ『最後のいくさして見せ奉らん』と考え実行したか』については、大学院生から「校定平家物語百二十句本』の提示があり「巴は義仲の菩提を弔うために落ちのびており、その意志をかためて最後の戦をして見せ、落ちのびたのだ。」という説明があった。高校生は「巴が泣く泣く落ちのびた」という記述に感動しつつも「史実確認ではなく、現在手元にある教科書『平家物語・覚一本』本文から根拠を見いだし物語として読解をするべき。」との声が多く上がった。

また留学生から「人は誰も死にたくない。巴は声に出して言っていないが『逃げたい』と欲していたはずなので、義仲から『いづちへも行け』と言われて喜んで逃げたはず。」との意見が出た。高校生は「巴は最後まで義仲と一緒に戦いたかったはず。」と考え、文中から様々な根拠を見いだし、班別ワークシヨップ、プレゼンテーション、意見交流へと白熱した展開を見せた。

〈授業やワークシートで出された主な意見と、まとめ〉

I 『木曾の最期』の作品全体や登場人物について、どのようなことを感じましたか？

①登場人物に関するもの

a. 義仲

○義仲はとらえ方によって良いリーダーとも考えられるのだなと思つた。

○やはり義仲は巴のことを思つて逃がしたのだと思つた。部下や恋人のことを思っている。

○人を殺し合うような残酷な時代であっても、共に戦つてきた兼平のことを心配し、後ろを振り返つてしまったというような意志の弱さが私にもあり、義仲に共感しました。

義仲は、男女を問わず圧倒的人気であつた。友や部下、恋人を思つて揺れ動く心理が共感を呼び、話し合い活動によつて仲間を思う優しさが再確認され、生徒達は「やはり」という言葉を用いて組織のトップにふさわしい人間と判断した。

b. 巴

○巴は義仲に言われたことを素直に受け入れられない。気持ちのぶつける所がないから御田八郎に戦いを挑むことどうさ晴らし。

○巴は、うすうす義仲が心配してくれていると分かっていたが、自分の力を信じてくれなかつたというのに反抗して、最後に首をきつたような行動をした。

○義仲が何度も逃げるといい巴はその真意をわかつていたので、本当は最後まで義仲の力となり戦いたかつたが自分の意志を最後の合戦で表したかつた。

○巴は義仲のことを愛していて義仲には最後まで武士として戦つ

てほしかつたし、最後に自分が強いことを示して、自分の心配をされないようにするために最後の戦をしたのだと思つた。

○巴は戦のときに名乗りをあげなかつたことから、自分のためではなく義仲のために戦つた。

○巴は戦場において男と同等に扱つて欲しがつたのではない。本当にそうだつたら、義仲の言うことを聞いていなかつたはずだし、そういう気持ちがあつたとしても義仲を思う気持ちの方が上だつたのではないか。

○巴御前が本当に武家社会への挑戦をしたのか疑問が残ります。結局は武士道を守つた？

巴が最後の合戦をした理由についてさまざま意見が出た。やけを起こして敵軍に飛び込んだ、最後まで義仲と戦いたい意志表示、自分は強いので後のことは心配ないと示したかつた、名乗りを上げていないのだから自分の名誉ではなく義仲のために戦つたはず、一見当時の女性らしくなく感じるが最終的には恋人の名誉を守つて戦線離脱した武家社会の中の女性であるといった意見が出された。

大学院生からの新しい資料・留学生からの思いがけない意見も示され、司会を務めた生徒が何度か話し合いをコントロールする必要があるかつた。

c. 兼平

○兼平についてもっと触れてあげたかつた。

組織のNo.2、または中間管理職のトップとして、揺るぎない人気があった。ただ兼平肯定論者の思いの強さはやや情緒的で論理性に欠け、兼平否定論者を納得させるにはいたらなかったように感じた。

d. 義仲と巴

○義仲は、最初に自害するきわになって兼平を振りかえったことなどから、あまり意志の強さを持っていない人で、本人もそのことに気づいていると考えられる。自分が追いつめられた時、「巴にはどうしても逃げてほしい。」と願った。それに対して巴は、女であるのにもかかわらず、一騎当千とまで言われ、強く、男勝りな性格であった。そして、その巴の性質を義仲はよく理解していたと考える。なので、「巴に生きていてほしいが逃げろ」と言ってみても巴は逃げないだろうと思ひ、「自分の名誉のために逃げてくれ」という言い方をし、巴に反論され、意見がゆらぐことがないようにしたのだと思う。義仲はこのような言い方をする、巴は義仲の名誉を汚すようなことはできないので、反論できないだろうと思っていたのだと思う。

一方巴は、その義仲の「巴に逃げて生きのこってほしい」という遠まわしの願ひ、愛情を感じ、受け入れようと思った。しかし、男の下に女という武家社会の情勢に対する反感の気持ちもあり、その男と女のピラミッドに従ひ、自分の名誉を守るために逃げろといわれたことにも反感を感じていた。なので、そ

の反感の気持ちを、「最後のいくさ」として見せることで示し、「私はあなたの家臣としてここまで戦い、つくし、主従五騎になるまで生き残ってきたほどの者だぞ。」という思いをぶつけた。しかし、義仲からの最期の愛情を尊重し、受け入れようという思いがあったので、結局は逃げたのだと思う。

義仲はなにより「巴の命」を、巴は何より「義仲の愛情」を尊重したのだと思う。

人間関係にしつかり踏み込んだ読解を行った。当初は「義仲と巴の別れの場面」「義仲と兼平が討たれる場面」と捉えていた生徒が、二人の行動や会話から、心の底にある最後まで互いを思いやる心情に共感していったようだ。

また、話し合い活動によって読解を実感する生徒も続出した。授業最後の振り返りシートは数行分の空欄しか設けていなかったが、紙面いっぱい意見を書き入れた生徒が何人もおり、語りきれない物語の魅力を実感した。

e. 義仲と巴・義仲と項王

○項王はプライドと恋人では、プライドを優先した。しかし義仲は恋人を優先した。自分のプライドよりも巴を愛する気持ちの方が大きかった。

「お市の方」「則天武后」といったさまざまな比較も出されたが、残念ながら明確な根拠とならず笑いを誘ってしまった感がある。

②軍記物語に関するもの

○戦の時代でも、人間としての「心」が豊かに表れているところに改めて感心しました。

○大事な人を思う気持ちや、最後まで一緒にいたい、力になりたいと思うことはどの時代においても（どれだけ社会の考え方が異なっても）変わらないのだと感じた。

合戦という背景に触れ、人間としての「心」の大切さが指摘された。

③遠隔地の学生の意見に関するもの

a. 留学生の意見に対して

○中国の留学生は「巴が結局最後に逃げたということは本当は逃げたかった」という考え方で、私は「巴は本当に最後まで木曾殿と共に戦った」という考え方であった。私の意見は日本人である一年一組、教育大研究生と同じだった。（中略）今回話し合ってみて、我々日本人だけの固まった意見だけではないということを知ることができたということが一番の学びだった。

また、留学生の方々にはきはきとおっしゃると思いました。日本人はもう少し自分の意見に自信を持つべきではないかと考えた。

留学生からの「恋人である武将が負けると分かったのだから、巴は逃げたかったはず。『いづちへも行け』といわれて喜んで逃げ

た」という意見に反論が続出した。留学生の「巴の本音はどこにも記されておらず、死ぬより生きたいのはあたりまえ」「生き延びてこそ恨みは晴らせる」という考えに対し、生徒は本文から「あまりに言はれ奉つて」「最後のいくさして見せ奉らん。」等の根拠を挙げ、物語読解として反論した。

b. 大学院生の意見に対して

○別の平家物語に巴が別れを言う時に泣いて「義仲を弔うため云々」と書いてあることを知った。

○教科書以外の文献を使うならば、先に配るなどしてほしかった。

大学院生が示した『校定平家物語百二十句本』に対して高校生から「史実を考察するのではなく、『平家物語』の読みを深めるべき」との意見が出た。

II 今日の話し合いやグループワークで、心に残った他の人の発言や行動はありますか。

①留学生の意見を通して

○同じ文章でもやはり人それぞれ捉え方が違って、特に巴と義仲の別れの場面では、巴は「逃げたい」と思っていたという新しい意見があつて新鮮でした。

○「義仲が『巴が生きたい』という考えをくみとった」というの

がこちらのとらえ方では多分でないものであったので面白かった。

○中国の留学生の方が巴は逃げたいと思っていた、という考え方を持っていました、ならば戦う必要がないと思いました。

② 大学院生の意見を通して

○大教大の方が言った、巴は泣く泣く義仲に別れを告げたという言葉に少し感動しました。

③ 物語の読解を通して

○「お家のため」「名譽のため」といった考え方が分かった。

○登場人物の心情把握が違った。大教大院生「巴を逃がしたのは義仲の供養のため」。留学生「巴は逃げたいと思っていたから逃げた」。高校生「愛する巴を死なせたくなかった」。

○「あまりにも言われたから巴は仕方なく逃げたので、逃げたかたわけではない」という意見には大賛成です。

○巴が素直に逃げないだろうから、義仲はわざとに強く言ったのだと思うというのは、とても納得がいったし、そうだろうなと実感できた。

○巴が戦ったのは、最後まで義仲と一緒にいたいという意思表示だという意見に納得しました。

○巴が御田八郎を討った理由で、「自分が逃げるときに義仲の名譽を傷つけるようなことはしない。自分は凄いなだ。」ということを見せつけようとしたから、というところ。

○巴は義仲に対し、自分は強いから心配しなくてもよいというアピールをしたのだという意見に対して同意した。

④ 言語活動を通して

○巴が本当は生きたかったという意見に対して何回も、「こう本文にあるからこうではないか」と反論していた。

○今日のような大きな会でどうどうと自分の意見を主張できるのがすごいと思いました。

まだまだ意見を述べたい気持ちにあふれる記入が多かった。とりわけ「愛」「身分」といった言葉が出た後、高校生の意見発表は活発に盛り上がった。同じ高校生の意見はもちろんのこと、留学生や大学院生の意見をしっかりと聞き、三者三様の意見を咀嚼しようとする姿勢が読み取れた。

高校生の純愛型、大学院生の文献型、留学生のドライな歴史観によって文書の切り取り型が異なることが浮き彫りになった。

Ⅲ 今日の話し合いやグループワークで、自分自身どのような役割を果たしましたか。

○発表。前に出て、自班の考えをしっかりと伝えた。

○分かりやすいようにホワイトボードに字を書いた。ホワイトボードのレイアウトを考える。

○話し合い。話し合いの中で、みんなの意見をまとめた。深く考えて意見を出し合えたと思う。

○問われた意見に対し、反論や答えを出した。

○みんなで意見をどんどん出し合うことができました。こういう

考え方もあるんじゃないか、という他の方向から見た意見も出し合うことができました。

○他の人の意見が通り過ぎて、自分の意見が理にかなってなさすぎて悲しくなった…。

自分が果たした役割を発表・質問のように具体的に記入しつつも、意見のやりとり、意見をまとめる、意見交換から新しい気づきを得るといった話し合い活動を明確に意識した生徒が多数いた。

IV 今後、遠隔授業システムを使うなら、どのようなワークシヨップを行ってみたいですか。

①積極的な意見

○もつと準備をして時間も長くする。もつと少人数。もつと深い意見の交流。

○英語など、外国語の授業をネイティブの方と話したり、異文化交流がしたいです。

○せっかく遠い人とつながれるのだから、海外の人とコミュニケーションをとっていききたい。

○他の教科でも意見交流。世界史の解釈。

○総合学習で、「持続可能性」に関わる社会的な問題を討論。

○日本中で同時に話し合う。

②改善点の指摘

○一番後ろに座っていたので、意見が時々聞こえなかったりしてあまり自分の意見を述べる事ができなかった。

○前の方で討論が盛り上がり、参加しにくい感じがありました。
○後ろの人によく聞こえるようなアプローチが必要。

遠隔授業システムの初導入ということで、最初は生徒が積極的に関わるかと案じたが、好評だったといえる。「もつと。」という声が多く、話し合い活動に興味深く取り組み、今後も継続したい気持ちがあえた。とりわけ留学生の意見は斬新だったらしく、ほとんどの生徒が今後「文化の異なる海外の人の意見を聞きたい」と記入していた。

ただ、現在のシステムではマイクを持った一人しか話せないため、挙手してもなかなか発言の機会が得られずいらだちを感じた生徒もいたようだ。場所、人数、テーマ設定等今後の検討課題とした。ただ、遠隔授業映写用の電子黒板に向かって話す生徒も複数いたため、生徒自らの気配りとして遠くの席、後方の席の人たちにも分かるよう話す姿勢が大切との反省も複数出た。

V 今回の授業について自由記述

①物語を読んで

○人物同士の気持ちはくわしくは書かれていないが、小さな行動でしめされていて、気持ちが読み取れるところに気がつくこと

ができた。

○こんな風にいるいろいろ話し合うことができる作品だけあって、それぞれの登場人物の心の奥にある感情の見え隠れする、しかしはっきりとはその心の声を作者なりの考えで軽々しく明記したりはしていない感慨深い作品だと思った。

○今まで聞いたことのない話や意見を聞くと、三人の人物への考え方も変わると思った。

○意見の幅が広がって、よりよい考察ができると思います。

②異なる意見を持つ三者と意見交流を行って

○遠隔授業というはじめての取り組みでしたが、中国の方の意見を聞くことができて、考えが広がった気がするので良かったと思います。

○国によって考え方が少しずつ違い、色々な捉え方があっておもしろかった。

○違う国の人と話すことで育った環境の違いによる考え方の違いがよく表れていてとても面白かった。

③「読み」を深める話し合いワークショップについて

○考えれば考えるほど疑問が湧いた。というか、自分の中で「こうだ。」と思っていたことに対しズバズバ指摘を入れられてしまい、自分的に解決できていた部分がまた疑問に変わってしまった。

○考えれば考えるほどいろいろな見方や考え方が出てきて、どれも本当かとは分からないけれどもいろいろな人の味方や考え方を知ることができて面白かった。自分が考えていたことを言って、それを他の人たちにきわどいところを突かれて、「正直」知ら

んー」と思ったシーンもあったけれど、他の人の意見を聞いてものすごい納得した。でも、自分一人ではきつと自分なりの考えにたどりつくことはできなかっただろうから、そこはかなりくやしかった。

通常の一方向型の授業では、登場人物に寄り添って読むことはできていなかったと実感した。特に古文の場合、生徒は主語や話の展開が分かれば良しとしているようでもあった。

今回の提案授業では、今まで簡単に読み飛ばしていた箇所から多くの心情が読み取れること、話し合い活動をしながら読むことでより積極的に読解に取り組み、面白さを確認しながら読み進められること、文化の背景が異なれば読みが異なること、意見交流にはコミュニケーション技術が必要なこと等、多くを得たといえよう。

五 遠隔授業システムを用い、言語活動を通して物語を読むことの意義

『平家物語』単元を終える頃、生徒達と「先生、通知表まだ持ってきてないんだけど、どうも『失せにけり。』です。」「先生、違うってこいつ、成績悪かったから親に見せずに『捨ててんげり。』って言うてました。」「悪党なり〜。」という会話があった。登場人物を取り上げ読みを深めつつ、芳醇な文学作品から生徒が確かな文法力も身につけていることを実感する。教科教育と社会や個々の内面が一致す

る幸福を感じる一瞬でもある。

「現代の高校生が歴史物語を読んで共感するかどうか」に不安もあったが、生徒達は葛藤に満ちた物語教材の面白さを互いに発見したようだ。現代の高校生が「義仲」や「巴」について読み取り熱く語る姿に、ちまたの歴史ブームとは異なる、物語読解が自分の生き方に関わる行為だと感動さえ覚えた。

今後の課題としては、次の点があげられよう。

① 教師は、物語のあらずじを追うのではなく、生徒自身が自分の生き方や考え方に照らし合わせて読み深め、価値観の異なる他者の読みと接し、それまでの考え方を振り返り理由や解決方法を導くような問いかけを作品から見出し続ける教材研究が必要である。

② 評価の観点として、「作品中の根拠や論拠・視点を正確に把握し、説明できているか」「実経験に生かされた読みかどうか」「言葉の力によるコミュニケーションになっているか」をしっかりと見定めつつ、教師自ら、生徒の意見を導き出せるよう実践を通して研鑽を続ける必要がある。

③ コミュニケーション力を通して物語読解授業を進めるとき、話し合う相手が「どのような第三者か」の位置づけが重要である。異なる意見や価値観を十分に伝え合える相手、話し合うテーマの厳選といった授業者側からの「しかけ・かまえ」が必要となる。

④ 遠隔システムを利用したコミュニケーションの場合、機器の同調や操作のため徹底した事前の打ち合わせや準備が必要で

あり、また授業者以外に機器操作のためのスタッフがつかうられることが望ましく、時間的・人的な問題が大きい。

六 おわりに

今回の取り組みは、大阪教育大学池田地区附属学校研究活動の一環として実施しました。本校は附属池田小学校の事件以来、一部の残虐な場面を含む作品を教材として取り上げることが難しく、細心の注意を払った授業展開となりましたが、生徒は『平家物語』に「物語」として向き合ってくれたと思います。互いの経験と照らし合わせながら協同して物語世界と向かい合う生徒たちの姿に、「読む」ことの意義を再認識させられたようにも思います。

本校初めての高大遠隔授業実施ということで小中学校の先生方、大阪教育大学附属学校課・情報処理センター、国際センター、教育学部教養学科情報科学科、および教育学部教員養成課程大学院教育学専攻科国語教育にご尽力いただき、授業実践報告を大阪教育大学Webにも掲載していただきました。

さらには、広島大学教育学部国語研究会・研究協議会で発表の機会をいただきましたことに心から感謝しつつ、今後とも力を育む授業構築、カリキュラム構築に取り組んで参りたいと思います。ありがとうございました。

参考文献

馬淵和夫編集『国語総合 古典編』（大修館書店 平成24年）

- 馬淵和夫編集『古典1 改訂版』(大修館書店 平成24年)
- 吉田賢抗著『新釈漢文体系 史記二(本紀)』(明治書院 平成21年)
- 鎌田正監修『漢文名作選 2 歴史』(大修館書店 昭和59年)
- 山本昭著『漢文の教材研究 第三冊 史伝篇(二)』(溪水社 平成10年)
- 市古貞次校注・訳『平家物語②』(小学館 1994年)
- 高橋貞一編『校定平家物語百二十句本』(思文閣出版 1973年10月)
- 和辻哲郎著『風土―人間学的考察―』(岩波文庫 1979年5月)
- 新渡戸稲造著『武士道』(岩波文庫 1938年10月)
- 堀内秀晃・秋山虔著『日本古典文学大系(第9) 竹取物語・伊勢物語・大和物語』(岩波書店 1957年)
- (大阪教育大学附属高等学校池田校舎)

資料①-1 『木曾の最期』構成表

『平家物語』 - 『木曾の最期』 - 登壇場・人物の行動・考へ方比較

- 主語の明示 木曾義仲、巴、今井四郎兼平
- 「面傍綱」 「最後のいくさ」にあたって規範行動
- 「点線部」 「最後のいくさ」にあたって意志行動
- 「波線」 一般化された主語 + 断定の助動詞「なり」による文末
- 「ゴシック体」 武將の最期の時の「てけり」「にけり」の違ひ
- （ ） 補足
- 【 】 思考の軸

【木曾右馬頭】その日の装束には、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鍔着て、鍔形打つたる甲の緒締め、敵物作りの大太刀はき、石打ちの矢の、その日のいくさに射て少々残つたるを、頭高に負ひなし、滋籬の弓持つて、聞こゆる木曾の鬼墓毛といふ馬の、きはめて太うたくましいに、黄蘗輪の鞍置いてぞ乗つたりける。鯛ふんばり立ち上り、大音声をあげて名のりけるは、「昔は聞きけんものを、木曾の冠者、今は見るらん、左馬頭兼伊予守、朝日の將軍源義仲ぞや。甲斐の一条次郎とこそ聞け。互ひによい敵ぞ。義仲討つて兵衛佐に見せよや。」とて、をめていて駆く。

【矢取りとしての作法遵守】

木曾三百余騎、六千余騎が中を縦さま・横さま・蜘蛛手・十文字に駆けわつて、後ろへつと出でたれば、五十騎ばかりになりけり。そこを破つて行くほどに、

それを破つて行くほどに、あそこでは四、五百騎、「こゝでは二、三百騎、百四、五十騎、百騎ばかりが中を、駆けわり駆けわり行くほどに、主従五騎にぞなりにける。

【木曾殿】
「おのれは、
疾う疾う、**女なれば**、いづちへも行け。」
→
「**女なれば**。」討死せんと思ふなり。
「**男なれば**。」もし人手からかはらば討死をせんすれば、
木曾殿の最後のいくさに、女を具せられたりけりなると言はれんことも、しかるへからず。」

とのたまひけれど。

【巴の考へ】

一条次郎、「たたいは名のるは大將軍ぞ。あますな者ども、もろすな若党、討てや。」とて、大勢の中に取りこめて、我討つ取らんとぞ進みける。

土肥二郎実平、二千余騎でよこへたり。

五騎がうちまで【巴】は討たれざりけり。

【一人の人間として読む「最期」】

【巴】は、なほ落ちも行かざりけるが、あまりに言はれ奉つて、「あつぱれ、よからう敵がな。最後のいくさして見せ奉らん」とて、控へたるどろに、

武蔵の国に聞こえたる大穴、御田八郎師重、三十騎ばかりで出て来たり。

【巴】その中、駆け入り、御田八郎に押し並べて、もつと取つて引落とし、我が乗つたる鞍の前輪に押しつけて、もつとも腕がさす。【巴】「お、切つて捨ててんけり。」その後、物具脱ぎ捨て、東國の方へ語ちぞ行く。

【矢取りとしての作法無視】

手塚太郎討死す。手塚別当落ちにけり。

資料①-2 『木曾の最期』 構成表

今井四郎 木曾殿、主従、騎になつて
「日ころは何ともおぼえぬ體が、今日は重うなつたるぞや。」

【今井四郎】申しけるは、「御身もいまぞ疲れさせたまはず。御馬も弱り候はず。何によつてか、一兩の御者番長を重うは思しめし候ふべき。それは味方に御勢が候はねば、脇指でこそさは思しめし候へ。兼平一人候ふとも、余の武者千騎と思しめせ。矢七つ八つ候へば、しばらく防ぎ矢つかまつらん。あれに見え候ふ、栗津の松原と申す。あの松の中で御引寄せ候へ。」とて、打つて行くほどに、

【矢取りとしての心得】
また新手的武者五十騎ばかり出て来たり。

「君はあの松原へ入らせたまへ。兼平はこの敵防ぎ候はん」と申しければ、

【木曾殿】のたまひけるは、「親仲、都にていかにもなるべかりけるが、これまで逃れ来るは、汝と一所で死なんと思ふためなり。所々で討たれんよりも、ひと所でこそ討死をもせめ」とて、馬の鼻を並べて駆けんとしたまへば、

【一人の人間として進む「最期」】

【木曾】「さらば」として、栗津の松原（自害）へぞ駆けたまふ。

【馬の蹄の響く「最期」】

【木曾殿】はたた一騎、栗津の松原（自害）へ駆けたまふが、正月二十一日、入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたりけり、深田ありとも知らずして、馬をさつと打ち入れたれば、馬の頭も見えざりけり。あふれどもあふれども、打てども打てども働かず。今井がゆくへのおぼつかなきに、振り仰ぎたまへる内甲を、

【死者への挨拶】

合はする者ぞなき。分捕りあまたしたりけり。

【矢取りとしての作法】

ただ、「射取れや」として、中に取りこめ、雨の降るやうに射りれども、

鑑よければ裏かかず、あき間を射ねば手も負はず。

三浦の石田次郎為久おつかかつて、よつ引いてひやうふつと射る。

石田が郎等二人落ち合つて、つひに木曾殿の首をば取つてけり。

太刀の先に貫き、高くさし上げ、大音声をあげて、「この日ころ

日本国に聞こえさせたまひする木曾殿をば、三浦の石田次郎為

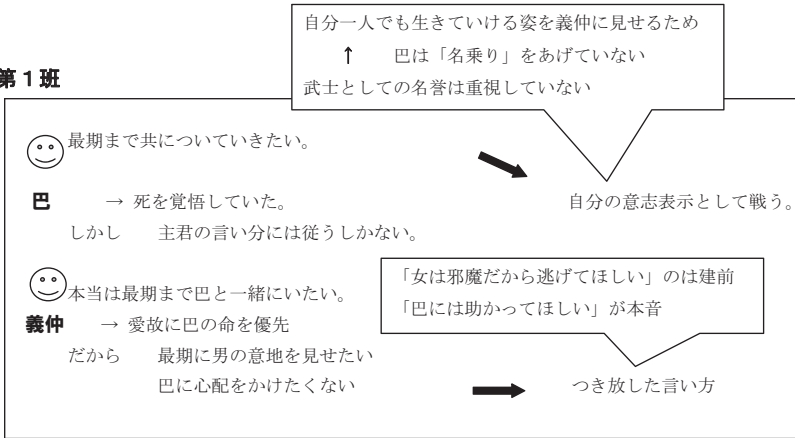
久が討ち奪つたるぞや。」と名のりければ、

【今井四郎】いくさしけるが、これを聞き、「今は誰をかばはんとてか、いくさをすすべき。これを見たまへ、東国の殿ばら。日本の剛の者の自害する手本」として、太刀の先を口に含み、馬より逆さまに飛び落ち、貫かつてぞ失せにける。

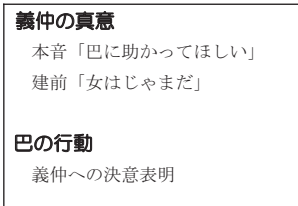
【矢取りとしての作法】

さてこそ栗津のいくさはなかりけれ。

第1班

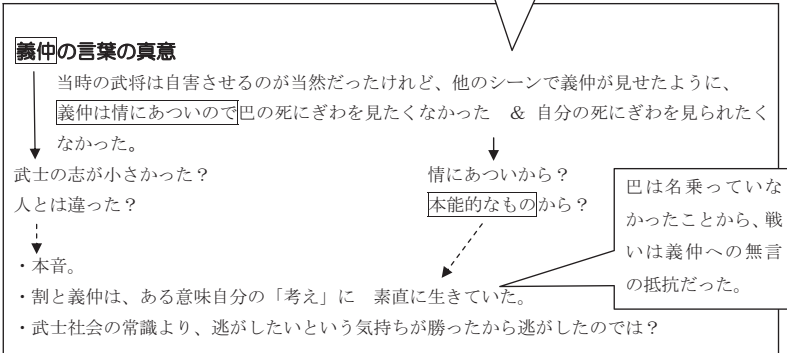


第2班



義仲は、巴に反論できないよう、わざとヒドい言い方をした。

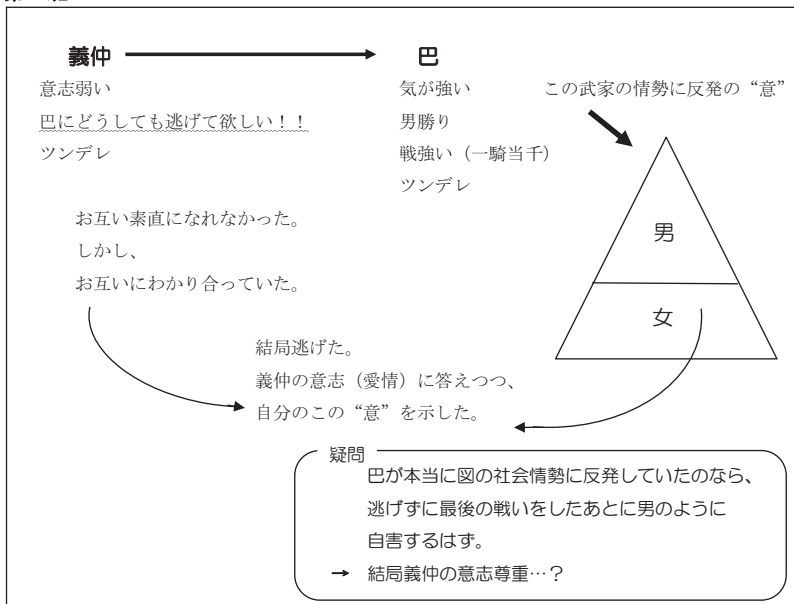
第3班



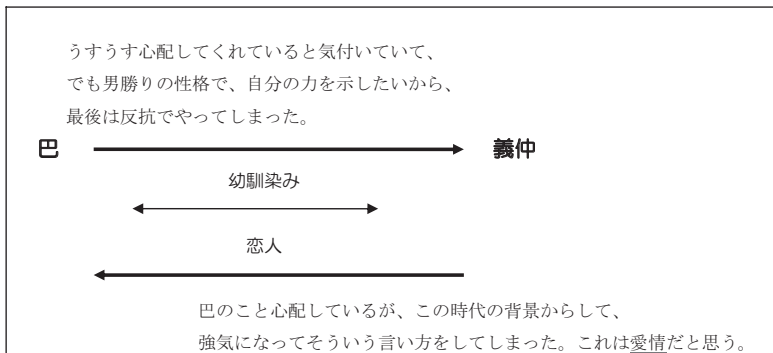
巴がとった行動について

- ・自分が逃げる際に、討たれて義仲の名誉を傷つけるような事はしないと自分の強さを見せつけることで、義仲を安心させるため。
- ・自分は強いのに、義仲に女だからと逃がされたのががくやしかったから。

第4班



第5班



第6班

本当は殺させたくない。でも、もう絶望的。

× 巴が討たれる

Q 義仲はなぜ巴を逃がしたか？

A 親友の安否を振り返ってみる人物が愛人を気づかわないわけがないから。

命令「いづちへも行け」 → 義理

Q なぜ巴は武將を殺してから逃げたのか？

A 1 義仲にアピール。

A 2 女の意地。

A 3 男勝りな性格。

A 4 戦略的行動。

第7班

義仲 → 「女なれば、いづちへも行け。」と言ったが、本当は邪魔だからではなく、生きてほしいからこそ言った。

巴 → 義仲にこのように言われたが、自分は少しでも義仲の力になりたかった。

⇒ 二人は幼なじみだったからこそ、巴は義仲の言葉の意味を理解し、逃げた。

第8班

義仲の真意

- ・ 巴に対する愛情
- ・ 自分が死ぬ所を見られたくなかったから。
- ・ 女を戦場に連れていくと恥になる。

巴の真意

- ・ 逃げたくないことを行動で示す。
- ・ 女性だからといって足手まといになるわけではないと義仲に伝えたかった

資料④ 授業案

大学との遠隔授業システムを用いた授業の展開

展開

学習過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価の観点
<p>前時の振り返りと本時の確認。</p> <p>登場人物に対する説明と感想を発表する。</p> <p>第三者の意見を加え、互いの意見を共有すること、より詳しく捉え直す。(その一)</p>	<p>『木曾の最期』と『項王の最期』の内容を振り返る。</p> <p>○教室内で互いに『木曾の最期』の主要な登場人物である「木曾義仲」「今井四郎兼平」「巴」の人物像を説明し感想を述べ、自分の意見と相手の意見を比べる。</p> <p>○遠隔授業システムを用いて、「木曾義仲」「今井四郎兼平」「巴」について新たな視点からの意見を加え相互に意見交流をする。</p>	<p>○既習の物語の概略を押さえさせる。</p> <p>○登場人物それぞれの考え方や行動の違いが分かるように簡潔にまとめ、感想を述べさせる。</p> <p>○物事を多面的に見、新しい価値観に気づかせ、自分の意見を見直させる。</p>	<p>○「木曾の最期」全体の流れを理解し、比較読みした『項王の最期』の類似点と相違点を把握しているか。</p> <p>☆説得力のある説明を行ったか。</p> <p>☆意見の違いとなる根拠を正確に把握したか。</p> <p>※異なる価値観への気づきに意義を見いだし、他者の価値観を自分の判断に加えたか。(その一)</p>
<p>異なる作品の類似する場面に触れ、対比を確認する。</p> <p>登場人物の言葉とそれを受けた人物の行動を取り上げ、登場人物それぞれの想いを読みとる。</p>	<p>○最期の時を迎えようとしている「木曾義仲」と「巴」の言葉や別れと、「項王の最期」で最期の時を迎えようとしている「項王」と「虞」の言葉や結末を比較し、意見を述べる。</p> <p>○「木曾の最期」中、義仲の「おのれは、疾う疾う、女なればいづちへも行け。」の言葉の真意を考え、また、それを言われた巴がなぜ「最期のいくさして見せ奉らん」と考え実行したかをグループで考え、まとめた意見を全体に述べる。</p>	<p>○明確な対比点を見出し、自分の考えを客観的に分かりやすく発表させる。</p> <p>○登場人物の心理の変化や、行動の理由を読み取り考えさせる。</p> <p>○グループごとにホワイトボードに書き込みつつ意見をまとめる。</p>	<p>○類似した場面における対比的な行動を、正確に読み取ったか。</p> <p>☆比較から読み取った内容や感じた意見を、他者と論理的に伝え合ったか。</p> <p>□文法や語彙に基づいて文章を正確に読解したか。</p> <p>★自分の考察を言葉で説明したか。</p> <p>☆多様な考えを共有することで、自身と自分に関わる集団の考えを深めたか。</p> <p>※異なる価値観への気づきに意義を見いだし、他者の価値観を自分の判断に加えたか。(その二)</p>
<p>第三者の意見を加え、互いの意見を共有すること、より詳しく捉え直す。(その二)</p> <p>本時の活動の振り返り。</p>	<p>○遠隔授業システムを用いて、「木曾義仲」「巴」の別れの場面での心情について新たな視点からの意見を加え、相互に意見交流をする。</p> <p>○交流によって得た新しい物事の捉え方や、本時の自分の考えの変遷を確認する。ワークシート記入。</p>	<p>○対比的な意見の勝ち負けではなく、一人一人に、自分と他者の意見を客観的に把握させる。</p> <p>○さまざまな意見の共有によって意見の幅がどう変化したか考えさせ、話し合いの意義を振り返らせる。</p>	<p>○「木曾の最期」の登場人物「木曾義仲」「巴」に対する理解を深めたか。</p> <p>※交流によって、幅広い思考方法を考察したか。</p>

☆話す・聞く ★書く ○読む

※見る・感じる □知識・理解



正面モニター



中央モニター



プロジェクター



操作パネル



操作機器



遠隔授業システムを用いた授業風景

班 評価シート ○印をつけましょう

() 班 () 番 氏名 ()

	A (よく出来た)	B (まあまあ)	C (もっと工夫できた)
班の話し合いで、よい意見が出ましたか？			
班全員の意見をまとめた発表内容でしたか？			
発表資料を、協力して作成しましたか？			
発表では、班として伝えたいことを伝え、質問にきちんと答えましたか？			
班で話し合った結果、自分の意見が確かなものになったり、人の意見を取り入れたりして、深まりましたか？			
今の班に対する総合的な評価は？			

個人学習・相互学習・共同学習の流れ

